

令和元年6月13日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370202

研究課題名(和文) 漢文笑話の訳読と研究

研究課題名(英文) Translation and Study of Jest Books in classical Chinese.

研究代表者

磯部 祐子 (isobe, yuko)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：00161696

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：漢文体笑話作品集のうち、『笑門』、『胡盧百転』、『笑堂福聚』、『善謔随譯続編』、『訳準笑話』および筆記小説『れい洲餘珠』の訳読を行い、個々の笑話を先行小咄・中国由来の典故・使用語彙の側面から考察した。その成果として、主に3冊の書籍と7本の論文がある。そのうち、『江戸的笑 日本漢文笑話研究』は、『訳準開口新語』、『善謔随譯』、『へん譚』の作品分析から日本漢文笑話の特徴を解明したものである。一方、『富山文学の黎明』(上下巻)は、江戸後期の筆記小説から笑話の存在を指摘し訳読したものである。また、『訳準笑話』については、「從中國笑話到日本小咄」(論文)において、明代『笑府』との相違を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
一連の江戸時代の漢文笑話の訳読と作品の分析により、江戸文学研究における基礎的資料の提示がなされた。また、江戸後期の漢文笑話が、江戸前期漢文笑話の特徴であった小咄の翻案や中国『笑府』の模倣の枠を超えて、風刺性・物語性が増加していったことを実証した。加えて、漢文小説集の中には、笑話的色彩をとどめるものもあることを明らかにした。同時に、漢文笑話が当時の漢文教育、或いは知識人の娯楽において、大きな役割を担っていたことも明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I translated "Shomon", "Korohyakuten", "Shodofukuju", "Zengyakuzuiyaku-zokuhen", "Yakujunshowa" and "Reishuyoju" written in classical Chinese in the Edo era. I also studied each of the comical stories focusing on the preceding Edo-kobanashi and allusion and characteristics of the vocabularies originated from China. As a result, there are mainly 3 books and 7 papers. "Jianghu de Xiao; Riben Hanwen Xiaohua Yanjiu" revealed the characteristics of Japanese comical stories in classical Chinese through the analysis of "Yakujunkaishingo", "Zengyakuzuiyaku" and "Hentan". Also in "Toyama bungaku no reimei", I pointed out that comical stories were contained in the written stories in the late Edo era. In "Cong Zhongguo Xiaofu dao Riben Xiaoduo", I examined the difference between "Yakujunshowa" written in the Edo era and "Shofu (Xiaofu)" written in the Ming dynasty.

研究分野：中国文学

キーワード：漢文笑話 訳準笑話 善謔随譯続編 笑堂福聚 日中比較文学 訳読

1. 研究開始当初の背景

江戸時代、社会体制の安定に伴って、文学芸術などの多方面においてその時代特有の作品が生まれた。江戸前半期には、大名や大身の武家が中国の書籍を輸入し、それらから儒学を中心とした文治体制を学んでいった。やがて、中期頃になると、儒者・浪人・町人なども和漢書を集め、文芸の裾野が広がり、江戸時代独特の文化を形成し始めた。この頃、儒学・諸子学などの漢籍に混じって、通俗ものと称される和訳の小説類も出版され、中国文化全般が社会の上下に浸透しつつあった。その中で、中国で出版された笑話書が輸入され、和刻される状況を迎えた。中国笑話書が日本に輸入されて、江戸の小咄や滑稽談に影響を与えたことは、既に研究がなされているが、当時の日本人が、中国笑話や随筆小説に手本を取り、自ら漢文体で笑話小説を作ったことは、あまり研究されておらず、石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』「第五章 白話文学と国文以外」、武藤禎夫による『漢文体笑話ほん6種』の出版と同書所載「漢文体小咄本について」の紹介の他、若干の作品紹介があるだけである。江戸時代、大田南畝蜀山人のような幕臣が、一方で役人として勤めつつ、一方で戯作作家として活動していたが、その背景には、漢籍及び和書を蒐集しよく読解し、当時中国の文人間で流布していた「煙粉小説もの」と即応する形で、いわゆる「吉原もの」を集めていたように、日本中国では相対する文芸現象が起こり、社会に影響を与えていたことが挙げられる。例えば、中国では馮夢龍『笑府』に代表される笑話集が編纂され、日本では、「滑稽もの」が江戸後期に増加していき、文学の一つの特徴にもなっていたが、この「滑稽もの」の先行として漢文体笑話が盛んに作られていたことは注目すべきである。

近年、このような、日中における類似する文芸現象、或いは朝鮮半島・越南の漢字文化圏全体にも関わる文芸現象に注目しているのが、台湾の王三慶、フランスの陳慶浩であり、『日本漢文小説叢刊』『越南漢文小説叢刊』(共に台湾学生書局刊)、『朝鮮漢文小説叢刊』を刊行し、『日本漢文小説叢刊』第一輯の5に「笑話類」を収めている。日本では、それを受け、『日本漢文小説の世界 紹介と研究』(白帝社 2005)にこれらの研究の紹介が収められている。しかし、日本における笑話全体にわたる研究は江戸文学や文化の地方波及を考える上で十分とは言い難い。

申請者は、これまで、江戸時代における中国文学の受容に関して、「江戸時代における中国戯曲の受容と展開」(『東北大学日本文化研究所報告』第21集 1985年)、「日本江戸時代対中国戯曲の接受と発展(中国語)」(『中華戯曲』第9集 1990年)、「中国才子佳人小説の影響 馬琴の場合」(『高岡短期大学紀要』vol.18, 2002)、「中国才子佳人小説の版本と諸外国への影響 「金雲翹傳」と「玉嬌梨」を例に」(『東アジア出版文化研究こはく』, 2003)、「東アジアにおける中国才子佳人小説の影響 『二度梅』と『好速伝』を中心に」(『東北大学中国文学論集』第10号, 2004)などの論文を発表し、江戸時代の日本人がどのように中国小説・戯曲を受容したかについて、才子佳人をテーマとした小説の分野で明らかにした。その後、上に述べた王三慶教授との研究交流の中で、漢文笑話が十分に研究されていないことから研究を開始し、第4回中国古代小説国際研討会(中国)において、その成果である「從《訳準開口新語》看日本漢文体笑話的特徴」と題する論文を提出・発表し、この方面の近世文学が、日本と中国では、微妙な相違点をもつことからその研究の深化の必要性を更に実感した。続いて、本邦初の漢文笑話「訳準開口新語」の他、漢文笑話の比較的早い時期に編まれた「善謔隨詠」「前戯録」「笑話出思録」、及び国内地方の文人によって書かれた「困譚」(『日本漢文小説叢刊』にも収める)について、訳読を行い日本漢文の一つの特色や地域文化の特性を示した。また、国内の地方の図書館などにおける漢文笑話本に関する調査を行い、困譚草稿など幾つかの新たな資料を見つけることができた。

2. 研究の目的

具体的な目的は以下のようである。

- (1)江戸後期の日本漢文体笑話作品の提示と版本について。
- (2)各漢文笑話の訳読とその特徴。
- (3)漢文体笑話に影響を及ぼした中国書籍および小咄について。
- (4)当時の漢学・書籍蒐集の状況と漢文笑話との関わり。
- (5)漢文の笑話本と漢文随筆との影響関係。

以上の点を、具体的な作品集『笑門』(1797)、『胡盧百転』(1797)、『笑堂福聚』(1804、明治に再版)、『如是我聞』(江戸後期)、『蜷洲餘珠』(文政年間)に焦点を当てて行い、江戸後期の漢文笑話小説誕生の状況から近世日本人の思考様式形成の一端を紹介し、日本的「笑い」の流れを導き出す。

3. 研究の方法

- (1)各作品の正確な訳読を主とするが、小咄等の類話と比較し、漢文笑話作品の特徴を導き出す。
- (2)それに先立ち、各漢文笑話集の書誌的研究を行う。
- (3)漢文笑話作品の編纂の目的について、作家、作品及び序を通して読み解く。
- (4)笑話中の引用漢籍を特定し、それはいかなる役割を果たしているかを明らかにする。
- (5)安永期に生まれた小咄本、化政期の落語などと比較しつつ、漢文笑話が生み出される文化

的背景を時代毎に明らかにする。

(6)個々の作品集の特徴を比較の視点から導き、漢文笑話集における「笑い」の流れを明らかにする。

4. 研究成果

日本における漢文体笑話作品集は今のところ 30 種ほどとみられるが、そのうち『笑門』(1797)、『胡盧百転』(1797)、『笑堂福聚』(1804)、『善謔随譚統編』(江戸後期) および筆記小説集(笑話作品を含む)『蛭洲餘珠』(文政年間)については、その訳読を終えた。また、個々の笑話を先行小咄・中国由来の典故・使用語彙の特質の側面から考察した。その成果は、二冊の書籍として世に問うことができた。一冊は、『江戸的笑 日本漢文笑話研究』(湖北教育出版社、2015、207頁)であり、そこに収めた『訳準開口新語』『善謔随譚』『へん譚』の作品分析によって、日本漢文笑話のおおよそが明らかになった。もう一冊は、『富山文学の黎明(一) 漢文小説『蛭洲餘珠』(巻上)を読む』(桂書房、2015、132頁)である。当該書においては、江戸後期の筆記小説の中にも、笑話が収められていることを指摘し、江戸後期の文人世界の一端を明らかにした。加えて、『蛭洲餘珠』の考察の過程で、これまで明らかにされてこなかった、江戸時代における『聊齋志異』の受容についても明らかにすることができ、「江戸時代における『聊齋志異』の受容『蛭洲餘珠』を例に」(『富山大学人文学部紀要第 64 号』pp.384-402、2015)として発表した。

また、『善謔随譚統編』について、個々の笑話を『沙石集』の影響・先行小咄との関連性・中国由来の典故の実態・使用語彙の特質の側面から考察し、「善謔随譚統編を読む」(『富山大学人文学部紀要第 66 号』、2017)として発表した。加えて、『笑堂福聚』についても、原稿発表を開始した。他に、『訳準笑話』(1826)もすでに基本的訳読を終えているが、『訳準笑話』作品と明代『笑府』との相違について考察し、寧波天一閣博物館・上海復旦大學古籍整理研究所共催の「明代的書籍與文學國際學術討論會(2016年12月3-4日)において、『譯准笑話』與『笑府』と題して口頭発表を行い、その論稿を『明代的書籍與文學國際學術討論會資料集』(2016 pp.330-344)に収めた。また、筆記小説集『蛭洲餘珠』(1819)後半部の訳読と解説を行い、江戸後期の散文集の中に、小咄由来の漢文笑話が収められていること、また、当時の地方における笑話受容の実態についても考察し、『富山文学の黎明2 漢文小説『蛭洲餘珠』(巻下)を読む』(桂書房、2017、160頁)として公刊した。

この一連の研究を通じて、個々の漢文笑話集の特徴および漢文笑話集の全体像が明らかになりつつある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 14 件)

- (1)「『笑堂福聚』を読む(一)」、『富山大学人文学部紀要第 71 号』、2019、(投稿中) 磯部祐子、査読無
- (2)「宮廷本天香慶節的特点以及对民間戯曲の影響」、朱万曙編『清代戯曲与宮廷文化』南京大学出版社、2018、pp.22-46、磯部祐子、査読無
- (3)「社会的ステータスと蔵書文化：中国と日本」、加藤好郎編 木島史雄編 山本昭編『書物の文化史』、丸善出版、2018年、p42、磯部祐子、査読無
- (4)「『善謔随譚統編』を読む(二)」、『富山大学人文学部紀要第 67 号』、2017、pp.270-288、磯部祐子、査読無
- (5)「『善謔随譚統編』を読む(一)」、『富山大学人文学部紀要第 66 号』、2017、pp.352-372、磯部祐子、査読無
- (6)「從中國笑話到日本小咄」、『文匯学人』、第 308 期(7-10 面)、2017、磯部祐子、査読有
- (7)「湯頭祖戯曲研究在日本」、『文学遺産(2016 第 3 期)』、2016、pp.29-34、磯部祐子、査読有
- (8)「金華道情の一側面」、『富山大学人文学部紀要第 65 号』、2016、pp.83-123、磯部祐子、査読無
- (9)「『譯准笑話』與『笑府』」、『明代的書籍與文學國際學術討論會資料集』、2016、pp.330-344、磯部祐子、査読無
- (10)「江戸時代における『聊齋志異』の受容—『蛭洲餘珠』を例に—」、『富山大学人文学部紀要第 64 号』pp.384-402、2016、磯部祐子、査読無
- (11)「『花名宝巻』考」、『富山大学人文学部紀要第 63 号』、pp.105-124、2015、磯部祐子、査読無
- (12)「日本大正昭和時期的漢学者、中国研究專家及社会評論家眼中的儒林外史」、『儒林外史与中華文化』pp.109-118、百花洲文芸出版社、2015、磯部祐子、査読有
- (13)「『善謔随譚』を読む(三)」、『富山大学人文学部紀要第 62 号』、pp.269-294、2015、磯部祐子、査読無
- (14)「『善謔随譚』を読む(二)」、『富山大学人文学部紀要第 61 号』、pp.396-416、2014、磯部祐子、査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

国際学会

- (1)寧波天一閣博物館・復旦大學古籍整理研究所共催「明代的書籍與文學國際學術討論會」、磯部祐子

子「《譯准笑話》與《笑府》」2016年（12月4日）

〔図書〕（計3件）

- (1) 『富山文学の黎明(二) —漢文小説『蛭洲餘珠』(巻下)を読む—』、桂書房、2017、全160頁、磯部祐子、森賀一恵、査読無
- (2) 『富山文学の黎明(一) —漢文小説『蛭洲餘珠』(巻上)を読む—』、桂書房、2016、全132頁、磯部祐子、査読無
- (3) 『江戸的笑 日本漢文笑話研究』、湖北教育出版社、2015、全207頁、磯部祐子、査読無

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。